

令和7年度第3回 静岡市立の高等学校の在り方検討委員会 会議録

- 1 日時 令和7年9月9日（火）14時00分～16時00分
 2 場所 静岡市役所清水庁舎 3階 第1会議室
 3 出席者 （委員）村山委員長、佐野委員、志村委員、溝上委員
 （オブザーバー）4人
 （事務局）中村教育長、増田教育局長、西島教育局次長、
 小澤学校づくり推進監
 教育総務課（6人）、プロジェクトチーム（5人）

4 傍聴者 18人

- 5 議題 ・「新しい学校の姿」に適正した設置形態について
 ・上記の設置形態で実践できる学びについて

6 会議内容

(1) 主な意見

- 設置形態の選定：生徒や保護者の理解しやすさ、進学実績、財政面から、「単位制高校」と「中等教育学校」が主要な検討対象となる。特に「高校＋専攻科」や「高等専門学校（高専）」は、現時点では選ばれにくい形態である。
- 教育の「余白」の重要性：生徒が主体的に学び、自らの強みを伸ばすためには、教育課程に「余白」を設けることが不可欠。高校段階では単位の組み合わせによって、6年制の学校では教育活動の工夫や学習の前倒し等によって、余白を生み出すことが可能である。
- 地域との連携：地域への愛着を育むには、単に地域を学ぶだけでなく、他者からの評価や人との強固な繋がりを築くことが重要。静岡市がコーディネーター機能を持つなど、学校単独ではない仕組みづくりが求められる。
- 外部人材と教員育成：多様な学びを実現するために、特別免許状制度などを活用した外部人材の積極的な導入が必要である。同時に、教員自身の経験値を高め、力量を向上させるための仕組み（教員交流等）も不可欠である。

(2) 類型ごとの意見

- 単位制高校

【良い点】	多様な科目選択が可能で、柔軟なカリキュラムが組める。神奈川総合高校の例のように、高い進学実績も期待できる。
【課題】	中学生や保護者にとってなじみが薄く分かりにくいので、その利点を丁寧に説明する必要がある。

- 高校＋専攻科、高等専門学校（高専）

【良い点】	専門性を深めるユニークな学びが提供できる。
【課題】	中学生や保護者にとって分かりにくく、専門高校との住み分けも不明確。また、財政面での実現可能性が低い。

- 中等教育学校（6年制）、中等部＋高校（3年＋3年）

【良い点】	6年一貫教育は私立でも実績があり、中学生や保護者にとって理解しやすい。時間をかけて生徒を育成し、主体性を育む「余白」を生み出しやすい。
【課題】	特段の課題はなかった。

3 観点ごとの意見

(1) 入学時に生徒や保護者に選ばれる設置形態

- 「分かりやすさ」と「進学実績」が重要な選定基準である。
- 6年一貫教育（中等教育学校、中等部＋高校）は理解されやすい。
- 単位制高校も、進学実績と結びつけることで選ばれる可能性がある。
- 高校＋専攻科、高専は理解されにくく、選ばれにくい。

(2) 在校中に自分の強みを認識し、それを伸ばす学びの提供

- 教育課程における「余白」の創出が鍵となる。
- 高校段階では「単位の組み合わせ」が、学校の裁量として最も効果的である。
- 6年制の学校は、時間的余裕を活かしてじっくりと学ぶスタイルを構築できる。
- 主体性を育むためには、与えられた学習だけでなく、生徒自身が選択し、考える機会が必要である。

(3) 在校中に静岡市をよく知り、愛着を育む

- 単なる地域学習に留まらず、人と人との繋がりや他者からの評価を通じた学びが重要である。
- 静岡市が、都市部の生徒と地方の生徒やプラモデルや昆虫などのトピックに興味を持つ生徒を繋ぐ交流プログラムの中核を担うことができるのではないか。
- 市の産業や文化との連携を教員だけで見出すのではなく、市の産業政策を担う課等と連携して提供する仕組みを構築すべきである。

(4) 卒業後に静岡市に定着する割合を増やす

- 「定着」を直接の目的にするのではなく、生徒が静岡市を「我が事」として関わられるような教育を行うことが本質的である。
- その結果として、静岡市への愛着が生まれ、定着やUターンに繋がると考えられる。
- 他県からの視点を通じて、地元の良さに気づくことができるプログラムも有効である。

(5) 実現可能性（財政・制度面など）

- 「高校＋専攻科」と「高専」は経済的に実現が難しいのではないか。
- 多様な学びの実現には、外部人材の活用（特別免許状制度）と、市の予算による仕組みづくりが不可欠である。
- 教員の育成、経験値の向上も実現可能性を高める重要な要素である。

4 委員別の主な意見

村山委員長	<ul style="list-style-type: none">● 教育の「余白」は重要である。● 地域連携は人と人との繋がりが重要であり、市の産業と連携した仕組みづくりを期待する。
志村委員	<ul style="list-style-type: none">● 中学生やその保護者等にとって、単位制高校はわかりづらい一方で、6年一貫教育（中等教育学校や中等部＋高校）は理解されやすい。● 特別免許状制度を活用した外部人材の活用や教員育成の視点は、設置形態や教育内容とともに重要な視点である。
佐野委員	<ul style="list-style-type: none">● 生徒が主体性を発揮できる「余白」が必要であり、その観点から6年一貫教育に魅力を感じている。● 外部人材や卒業生のネットワークの積極的な活用を期待する。
溝上委員	<ul style="list-style-type: none">● 設置形態よりも教育の「中身」が重要で、進学実績を入り口としつつ、カリキュラムの柔軟な組み合わせが鍵となる。● カリキュラムの中身だけが学校教育をユニークにするわけではない。課程外も併せてユニークにすることも考えた方がいい。たとえば、他地域と交流する「逆の修学旅行」など、市が主導となり、静岡市が中核となるプログラムを検討してはどうか。